

渡里あずま



-FALL-



FALL

渡里あずま(表紙 inika)

プロローグ

断っておくが、キス自体が初めてな訳ではない。

ただ、昔の彼女とのそれは自分からで——だから、されるのが初めてと言われればそれは否定出来ない。

……そして、彼女ではなく彼、にキスをされるのも。

暖かいとか柔らかいとかは、解らなかつた。振り返ってみても、よほど呆然としていたのかよく思い出せない。ただ、早生さうせいが近付いてきたと思つた時にはもう、自分の唇は塞がれていた。

予想外の行動に目を閉じる事も出来ず、固まる日向ひなたの視界が傾く。それが早生に押し倒されたからだと思つた時には、彼は絨毯の敷かれた床に転がっていた。

そんな日向の唇に、再び早生の唇が重なる。

触れて、離れて、また触れて——キスされているとは解るが、ありえなさ過ぎて頭が真っ白になっている。

「……何で、俺に？」

ようやく疑問を口に出せたのは、見下ろしている早生が少し離れてくれたからだつた。

そう、男同士に年の差（確か七歳）もだが、もつと大きな理由がある。

「僕の事、好きなんでしょう？ 両想い、なんですすよね？」

「それは……でもお前、好きな奴いるんだろう？」

早生からの言葉は確かに以前、自分が相手に電話で言つたものだ。改めて聞かされると恥ずかしいがそもそもその時、日向は相手の恋愛相談に乗っていたのである。

それなのに、どうして——再びの疑問は、けれど再び早生の唇によつて塞がれてしまった。

刹那、感触を飛び越えてビールの味がしたのは、一緒に飲んでいた相手の舌が挿し込まれたからで。

初めてキスした日に、デイープまでつてどうなんだ——この時はまだ、そんな馬鹿な事を思う余裕があった。

聞きたい、と思った

……早生との出会い、となると六月のあの日だろう。

とは言え、厳密に言う『会った』のではなくて『見かけた』のだけれど。

某インターネットプロバイダー会社。そのテクニカルサポート窓口に、日向が入社して五年。一般オペレーターをサポートするリーダーになって、三年になる。

特に専門学校などには行っていないが、日向はパソコンやインターネットが好きだった。

一応、男なので最初は就職活動もしたが、体調を崩して入院してしまった。コールセンターに入るのに特に資格はいらぬ。リハビリ代わりに、と紹介されて入ってから早五年だ。

「おい……何だ、アイツ？」

基本、派遣社員で形成されているコールセンターには良くも悪くも個性派が集まりやすい。

その事は理解していたつもりだが、今日から遅番（夕方六時から十一時）要員として入る新人達の一人を見て、日向は思わずそう呟いてしまった。

リーダーである日向は基本スーツだが、オペレーター要員の服装は肩や腹を出さなければ良い。だからシャツとデニムと言う服装自体はNGではないし、他の面子もそう変わらない格好をしている。

しかし、頭一つ高い身長とか。その上に乗っている小さくて、無駄に整った顔とか。

完璧過ぎて、そもそもどうしてここにいるのかが理解出来ない。何と言うか、そこだけドラマのよう。芸能人が、一般人を『演じている』気さえしてくる。

「久賀早生君、大学生なんだって」

「……つてもう、名前とかチェックしたのか？」

「私、今回はメインの研修担当だもの……まあ、確かにイケメンだけどね？」

「彼氏に泣かれるぞ？」

「一般論でしょうが。あ、でも心配かけたくないから、寿には内緒ね」

「ハイハイ」

同僚である足立未来の言葉に、笑いながら返事をする。

セミロングの黒髪に、大きな目。同様のスーツ姿（つまりはリーダー）である彼女とは、彼氏込みでの友人なのでお互い単なる軽口だ。

（ああ、それならアリか）

遅番要員は、バイト感覚の学生や仕事の掛け持ちをしている者が多い。副業なら、毛色の違うタイプが入る事もあるだろう。成程、と納得すると日向は朝礼（時間は遅いが）の為に未来と共にセンターの端（対応中のオペレーターに声が被らないように）へと向かった。

※

新人研修は、メインとサブの違いはあるがリーダーが交代で行う。

そんな訳で日向も、一ヶ月の新人研修の中で何度か担当をしたけれど——顔だけではなくインターネットやメールに関する知識を覚えるのも、そしてそれを電話で客に伝えるスキルも、早生は完璧だった。おかげで他の同期より早く、即戦力として着台（一人で客と対応する事）したくらいだ。

用語や仕組みに怯んだり、それを説明する難しさに挫けたりして研修前に辞める者も多い。だから逆に、デビューすれば一人前として、そして同じ職場の仲間として認められる。

そんな訳で、早生は先輩連中から食事や飲み会に誘われるようになった。

……まあ、女性陣としては所謂イケメンである早生に対する下心もあるだろうけど。

「酒まで強いとか、本当に無敵だな」

「井原さんだつて全然、酔つ払っていないじゃないですか」

「俺は、自分のペースで飲んでたからな。でもお前、注がれまくつてたろ？」

そんな飲み会の一つに、たまたま日向も呼ばれて一緒になった。夜十一時の終業後から飲んだので、普通に飲んでも二次会三次会となれば朝になる。徹夜オールとなれば、残ったのも数人だ。そんな中、帰る方向が同じだった為、日向と早生は他愛もない話をしながら地下鉄へと向かった。

日は昇っていて明るく、けれどまだそれほど人気はない。昼間はクールビズ用の半袖でも暑いかな、逆に職場の冷房で震え上がるというように極端だが、早朝だと適度に涼しくて気持ち良かった。

(意外と……だと、失礼か。うん、でも結構、話しやすいよなコイツ)

年下の部下との、他愛も無い会話。そんな穏やかな一時に、我知らず目を細めていると。

「……飲みたかつたんで、ちょうど良かったです」

「えっ？」

「一人だと、酔えないし……家だと、電話を待つてしまふんで」

ポツリ、と落ちた眩きに日向は目を見張った。

もしかして、早生は実は酔つ払っているんだろうか？　そして、今の眩きからすると——辛い恋にでも、悩んでいるんだろうか？

「じゃあ、もうちよつと俺に付き合わないか？」

「え？」

「どうせお前も今日、休みだろう？　メのラーメン……って、時間じゃないか。朝飯食つてくぞ
そう言つて数センチ身長の高い相手を見上げると、普段見た事がないような困り顔が返された。

（余計なお世話だったか？）

だから、話題を変えて無かつた事にしようと口を開きかけたが——他ならぬ、早生によつて遮られた。

「……食べながら、僕の話の聞いてくれませんか？」

気づいてしまった

子供の頃、早生の面倒を見てくれたのは家政婦の女性だった。母はいたが子育ても家事もせず、ただ穏やかに微笑んでいた。

「あの人は、私の顔が好きなんですって」

嬉しそうにそう言った母は、確かに家族の——息子である早生の鼻眞目を差し引いても、美人だった。ゆるやかに波打つ長い髪に、アーモンド型の瞳。

全体的に色素が薄く、あまり家に帰って来ない父の好みに合わせて白や淡い色合いの服を着ていた母。整いすぎて人形のようにだと思ったが、それがあながち間違っていないと知ったのは小学生になった頃だった。

……父には別の、いや、本当の家族がいる事。母が『愛人』や『妾』と呼ばれる存在だという事。

大人からはこつそりと、そして同級生からは悪気なく批難された。そう、悪いのは『正しい家族』ではない自分なのだと言わんばかりに、遠慮無く罵られた。

「早生は私に似て綺麗だし、頭も良いから。文句をつけられるのが、そこしかないんでしようね」

父至上主義である母からは、そんなずれた言葉しか返されず。滅多にやって来ない（真実を知ってからは『帰る』とは使わなくなった）父の機嫌を損ねるのも面倒（主に母が）なので、早生は勉強やスポーツを頑張った。生まれはどうしようもならないが、それ以外では絶対に周囲に負けたくなかったからだ。

（早く大人になって、自立すれば自由になれる）

そう思っていたがまもなく小学校を卒業しようという頃、母が交通事故で突然死した事でそれは果たせなくな

施設にでも放り込まれるかと思っていたが、流石に申し訳なく思ったのか——あるいは、母親似だった事が影響したのか。早生は、寮付きの私立校に通う事になる。

他にも『訳あり』の生徒がいるせいかな、今までのように陰口や悪口を言われる事はなかったが、遠巻きにはされた。それでも今までよりはマシだと思い、独りでいたのだが。

※

「何でお前、そんなつまらなそうな顔してるんだ？」

高校になり、寮で同室になった外部生からそう言われた瞬間、思わず息を呑んだ。

そんな早生に軽く目を見張ると、次いで何故だか嬉しそうに笑って言葉が続けた。

「何だ、そんな顔も出来るんじゃないか」

「……僕は別に、君を面白がらせるつもりはない」

「『君』じゃないって。俺は、清見^{きよみけいた}恵太！」

「僕だって『お前』じゃない。久賀早生だ」

まんまと相手の迷惑にはまったような気がして、つい早生は言い返してしまった。内心、しまったと思ったが、恵太は気にした様子もなく、逆に屈託無く笑いかけてきた。

外部生は珍しい。だが、物怖じしない性格ですぐにクラスに溶け込んだ恵太だ。他の持ち上がり組から、早生の『事情』は聞いていただろう。

それでも、恵太は変わらずに早生に無邪気な笑顔を向けてきた。

最初は初めて出来た『友達』だから、こんなに嬉しいんだと思った。そう、早生がポーカーフェイスを崩した

時の恵太のように。

……けれど。

同じクラスで、寮の部屋も一緒。それなのに、少し恵太がいなくなっただけで寂しくて。

(あいつが賑やかだから、そう感じるのか?)

そのくせ、教室で他の同級生と話している姿を見ると、何だか胸がモヤモヤした。

(初めて出来た友達だから、ヤキモチ?)

浮かぶ疑問にその度、答えを返していたが——それが何だか、自分に言い聞かせるようだと思つて戸惑つた頃。

「俺、彼女出来たんだ」

笑顔で、照れながら恵太が教えてくれた瞬間、早生は気づいてしまった。

(僕は、恵太が好きなんだ)

気づいた瞬間に、失恋して——だが、諦める事も出来ないまま、早生は恵太に笑いかけた。

「そうなんだ、おめでとう」

……自分の顔は見えないけれど、その時、早生の脳裏に浮かんだのは母の微笑みだった。

親友としても、恵太の傍にいる為に微笑む早生のように——母も父に継ぐ事しか出来ず、ああして微笑んでいたのだろうか?

※

恵太の彼女は、早生達より二歳年上で。卒業して短大に進学し就職をした。そして高校を卒業し、付属の大学に進学した恵太は彼女と一緒に暮らすようになった。

同じ大学に進学した早生は学生寮を出て昔、母と暮らしていたマンションで暮らし出した。寮に残らなかったのは、父からマンションを譲り受ける話が出たのと——寮の部屋が、個室ではなかったからだ。

同じ大学ではあるが、恵太とは学部が別で。帰りも、彼女の元へと恵太は文字通り飛んで帰る。だが、社会人の彼女と時間が合わなかったりすると、恵太は早生に電話をかけてきた。

寂しい時、自分を思い出してくれるのは嬉しい。話せると、自然と頬が緩む。

けれど次にこうして話せるのは恵太と彼女との、ささやかなすれ違いの時。電話が終わった後、次はいつかと——結果的に、恵太の不幸を望んでしまう自分に落ち込んでしまう。こんな一喜一憂する様を、寮で他の者には見せられない。

(だけど、独りで待っているのも……辛い、かも)

スマートフォン画面に目を落としながら、早生は本音と共にため息を一つ落とした。

FALL

発行日 2022年7月16日

著者 渡里あずま(表紙 inika)
<https://www.pixiv.net/member.php?id=45432486>

連絡先 contact@rainbow.sakura.ne.jp

印刷 シメケンプリント / Adobe Stock

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
